



Title	明治末期のアール・ヌーヴォーならびにセセッション様式模倣に対する平山英三の批判について : 大正元年開催第六回商品改良会出品講評を中心に
Author(s)	天貝, 義教
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56291
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治末期のアル・ヌーヴォーならびにセセッション様式模倣に対する平山英三の批判について

— 大正元年開催第六回商品改良会出品講評を中心に —

天貝義教／秋田公立美術大学

1 はじめに

明治30年(1897)から明治41年(1908)まで工業図案教育にたずさわった平山英三は明治44年(1911)にイタリアのトリノ市で開催された万国博覧会(以下トリノ博と表記)に派遣され、帰国後に、トリノ博についての視察談話を発表するとともに、輸出振興のために図案の改良策を主張し、とくに大正元年(1912)に開催された第六回商品改良会では審査長を務め、輸出处の陶磁器・漆器・客室用洋風家具の図案について講評を残した。そのなかで平山は当時日本で流行していたアル・ヌーヴォーならびにセセッション様式を模倣した図案を批判し、日本の図案について固有の趣きを具えなければならないことを主張した。本発表では、平山英三による第六回商品改良会における西洋様式模倣批判と平山のトリノ博を通じてのヨーロッパ体験との関係を考察し、平山による講評が、安田祿造による経済的工芸の主張の普及の下地のひとつとなったことを指摘したい。

2 第六回商品改良会

第六回商品改良会は、大正元年(1912)11月1日から同30日まで、「輸出处の陶磁器、漆器並に客室用洋風家具に应用すべき意匠図案」を募り、優秀なものを選定して輸出用商品を改良することを目的にして開催された。その講評のなかで、「佳作の採るべきもの」はあるものの「一頭地を抽いたる所の傑作と称すべきもの」はなかったと結論する平山は、漆器の図案について、「所謂ヌーボー式に類する模様を蒔絵に应用した図案」を「其の出来栄上漆器には適当しないもののやうに思は

れます」と率直に批判した。また洋風家具の図案について、「其の出品の種類は棚の図案が最も多く、其他には椅子、卓子、置物台、屏風等の図案」であると指摘したうえで、これらの「意匠は概ね皆近來流行の所謂セツセツシヨンとかいふ様式に属する」もので内地でも流行し歓迎されているが、純西洋式で日本固有の趣がないことを指摘して、「其の形式に於て又は装飾に於て多少日本固有の性質を帯びさしむることが必要であらう」と強調した。以上のような批判は、トリノ博を通じて直接体験したヨーロッパの家具・応用美術品の形態・装飾・色彩における変化に関する認識が反映されていたといえよう。

3 平山によるトリノ博視察談話

トリノ博については、平山は「伊太利万国博覧会視察談」と題した論説を発表し、ヨーロッパにおける応用美術品や一般の家具類における形状と装飾にみられる変化を報告している。それによれば、トリノ博に出品された陶磁器等の形状は、「純然たる西洋式のものは殆ど稀れであつて東洋式即ち日本若は支那風の簡單なる形状」が一般的であり、その装飾は、「日本若は支那風に類した稍不規則なる半ば写生的半ば模樣的」であつて、模様着色は、「余り濃厚な色でなく落附いた淡白の色」が主として用いられていたという。また、一般の家具類の様式は、「一般に其形式が簡單になつて居つて豊富なる彫刻又は刳り形等を施したものは殆ど流行して居りません」と報告され、さらに「博覧会の出品のみならずホテル等に於て其客室又は談話室などに新に具へ付けられる所の家具類を見まして

も概して皆簡単なる形式のものが行はれて居るのであります」と報告された。平山は輸出向きの製品の改良を訴えた別の論説で「形状の上に於ける着想を第一とし、模様の新考案を以て第二とし、常に輸出先の趣味嗜好及び流行の推移を見逃す事なかつたならば、輸出貿易の振興を来す上に多大なる効果を奏するに相違ないと信ずる」と、流行の変化への観点を強調した。このような主張もトリノ博の体験にもとづくものだったといえよう。

4 トリノ博とウィーン訪問

イタリア建国五十周年を記念してトリノにおいて開催された万国博覧会への日本の参加については、現在、外務省外交史料館所蔵の『伊国羅馬市及チュラン市ニ於テ万国博覧会開設一件』と、大正元年（1912）に発行された伊太利万国博覧会出品協会の編集による『伊太利万国博覧会出品協会事務報告』によって知ることができる。この報告書によれば、平山は、「伊太利万国博覧会出品協会」の理事長としてトリノ博に派遣された。平山家には三冊の日記が残されており、それによれば8月2日から16日にかけて、ブタベストを含むウィーンへの小旅行をおこなっている。日記によれば、ウィーン滞在中の平山を、当時ウィーンのクストゲヴェルベシューレに留学していた東京高等工業学校工業図案科講師安田禄造がたずね、二人が「相伴ッテ市街ヲ散策シ美術工業博物館」を見学したことが記録されている。日記では、「主トシテ学校ノ図案ヨリ成レル銀器、玻璃器、貝細工器、革製手提等ノ小品ヲ陳列シアリ、其裝飾ハ重ニ東洋的ノ様式シテ一種一雅致ヲ具フルモノナリ」と報告している。この記述にみる「学校」とは平山がかつて留学したウィーンのクストゲヴェルベシューレのことである。トリノ博当時のウィーンのクストゲヴェルベシューレ、美術工業博物館、オーストリア帝

国内の工芸専門学校の活動については、イギリスの雑誌 The Studio によって広く国際的に紹介されており、A. S. Levetus による 'Arts and Carafits at the Austrian Museum for Art and Industry, Vienna' と題された記事では、クストゲヴェルベシューレの教官ヨーゼフ・ホフマンとコロマン・モーザー、その同僚たちや教え子たちの作品には、「詩的 (poetic)」でありながら「論理的 (logical)」でもある「多才さ (versatility)」が指摘されている。平山と安田が目にした「一種一雅致」を具えた「学校ノ図案ヨリ成レル銀器、玻璃器、貝細工器、革製手提等ノ小品」は、こうした「多才さ」によって特徴づけられていたといえよう。

5 おわりに

平山の日記には、ウィーンにおける安田禄造との会話の内容は記録されておらず、セセッション運動以降の動向やドイツにおける工作連盟の動向についての言及もみられない。しかしながら、ウィーンにおいて、平山はセセッション運動を経て、さらなる斬新さに向かう様式の多才な変化を直接感じ取ったとみてよい。平山のトリノ博を通じてのヨーロッパ経験においてもっとも重要なのは、こうした変化への認識であったといえよう。平山は、おそらく、このことについて教え子の安田禄造と語り合ったのではないだろうか。

第六回商品改良会におけるアール・ヌーヴォーならびにセセッション様式模倣図案の批判は、こうしたヨーロッパにおける様式変化への積極的な対応を促すものだった。ウィーンから帰国した安田禄造の「経済的工芸」の主張は、こうした平山の批判の延長線上に位置づけられる。平山の批判は、安田の主張が日本国内で普及してゆく下地のひとつとして、見逃すことはできないのである。